

詩部門優秀賞

月に揺蕩う

一関第一高校2年 千葉真桜

夜もすがら、
眠れずに布団の上で寝返りを打つ。

ただ腹を抱え、
その時が過ぎるのを待っている。

今宵、わが身は血の海に揺蕩う欠けた月。
その海は仄暗く、自らの流した血で
作られている。

蛹が蝶になるように
その身を作り変え、完全変態するよう、
満ちた月が欠け、また元に戻るように
時に痛みが伴うそれは数十万の時間を繋ぎ、
わが身に起動した命のプログラム。

人類がこの世に生まれ、
幾度も繰り返されてきた
時限装置付きの呪いにより、
熟した柘榴が自らその身を裂き、
鮮紅色の実を晒すように
わたしの一部は剥がれ落ち、
そして新たに作られる。

女性として生を受け、
 起動されたプログラムは
 まだ止まることはない。

女が男らしく振舞おうとも、
 男が女らしく振舞おうとも、
 その身が属する性のカテゴリーから
 逃れることは難しい。

男女平等だのなんの言うけれど、
 真の平等、自由はこの身がこの楔から
 解き放たれた時に訪れるのではないかと、
 今宵も、取り留めのない思考の波に揺られな
 がら
 暗闇の中で目を閉じる。

ああ、けれども、私もその理の中で
 生まれた存在だから。

わが身の呪いが解けるその日まで
 今宵も数多の欠けた月達のよう
 真綿の繭に包まれ、私はほの暗い血の海に
 揺蕩う月になる。